紹介・臼杵市文化財管理センター蔵『長崎道中日記』（四）

徳岡涼

宰府の町出迦れ南の野原、二日市への道を右に取。松林の中に、
榎の頓宮（トグウ）　天満宮
此所はむかし菅公太宰帥に左遷の時の御殿跡也。
鳥居　拝殿　本社あり。
毎年八月廿二日宰府より天満宮此榎の頓宮の御旅へ渡御あらせられ、翌廿三日、宰府御本社へ還御あらせられ候事、御例祭の由也。
田中に飛梅　だこ石　古跡あり。
是より天拝山の麓の方へ入込。暫行て、
通る古賀村　宰府より廿五丁
榎の頓宮神主（エノキノトグウ）　権藤雅楽藤原熊信（ゴンドウクマノブ）
此神主はむかし菅公左遷の以前より今に千年余の家筋にして、此先祖」（68裏）老母菅公の左遷ましませし事を深く憐みて、常々御側近く仕へ奉り、おうばくと称して、其子孫今に血脈連綿として、数代を経て此村に住居していと貧しく暮しけれども、今に榎の頓宮の社を受持ける也。此家より早縁綿帽子出る。弐百銅にて是を受。其人縁付次第、新に綿帽子一つ添、都合二つを此神主権藤氏へ返す事なる由、近年此事世間に弘まり、伊勢藤堂家よりも御使立当地黒田家は勿論、中津・奥平家よりも御守護御受被相成。近年は江戸表へ多く差出候由。此綿帽子は兼て拵置。八月廿二日、廿三日、榎の頓宮にて御祭の時、天満宮へ御冠せ申候て、夫を貯置、望の者へ頂戴いたさせ候事。尤、綿帽子の古き品は数々人に早

縁を結はせし品の由。
此通る古賀村より天拝山麓へ廿五丁」（**69表**）麓より天拝山絶頂・菅公御行場へ登り、十丁也。松山にて御宮あり。
天拝山の麓ふとじ脇の瀧にて御水行被成候由。
此近辺に温泉ありて、遠近の人多く入浴する由也。

夫より関屋の追分へ戻り、雑書の通り、昨日の道筋を福岡城下駅場へ戻り、預け物夫々受取。見付を出て、左右に門あり。福岡と博多の中の橋といふを渡り、〈此川宰府より流れ水下り、右福岡、／左博多其堺中の橋也。〉

博多　福岡領　福岡より壱里　家続也。
博多町百八町と申所にて九州の京都といふべき、奇麗にして繁昌の地也。秋月侯御茶屋并御蔵もあり。
又、柳町といふには色廓あり。名高き所也。尤、博多津とて船数々出入して、上方筋諸国への便利至てよろし。」（**69裏**）
又、此所店方、唐糸織物類抔といふ看板を差出して絹帯地を織出すか、当博多の名物なり。又筑前絞りとて、緋染、且紫藍色種々奇麗の品を仕出す所也。
博多出迦れ松原あり。道幅至て広く、左り側。

万年崇福寺
五山派　福岡侯御菩提所
松林の中八丁四面の大地にして奇麗の寺也。
御成門　平日閉之
勝手門より出入
楼門　御成門の真向
額　勅賜　万年山崇福禅寺
二階に羅漢あり
本堂　楼門の真向にあり。
鐘楼
庫裏　額　衆香国
方丈　」（**70表**）

箱崎　博多より拾八丁
入口右に宰府への道あり

八幡宮
一の石鳥居　海辺にあり
額八幡宮　左右に石大灯籠あり。
此浜辺至て景色よろし。此一の鳥居の正

面海中に机嶋見ゆる。
二の石鳥居　箱崎町通りあり。
朱の玉垣　左右石灯籠数々
左の方小社四つ、手水、屋根あり。
右の方、土蔵外に小社三つあり。
銘
豊臣黒田筑前守長政建立。
黒田如水孝高御嫡従四位侍従黒田筑前守長政侯也。　右に銅馬。〈本馬の／大さあり。〉
右に
神木の松　玉垣の内にあり。古代の松は枯、二代の松栄ふ。此松葉魔払に成。此松をはしるしの松といふよし。」（70裏）産婦此松葉を髪に載て居れは、廿三夜庚申其外忌嫌ふ日を過候て、子を産といふ。
楼門　檜皮葺
二重の額
敵国降伏
下の額　在
茲
日東文武憑誰
力長使蒼生仰
帝猷

曇	宗
栄	曄

崇福寺曇栄和尚名宗曄
亀井道載の弟也。
中楼門の大工竹田造立のよし。扉の錠は、後藤の細工槌目千疋猿の形ちに見ゆ。是名高き門也。
廻廊　廿壱間　四面左右後共小向あり。
左の門を出　鐘楼寺あり。
後の門を出　仏壇二つあり。　」（71表）
拝殿
鳩多し
左右に銅の獅子　銅の灯籠
本社　戌亥　三韓の方へ向ふ。
檜皮葺にして宮造り。他に殊也。
本社へ土間より上り、口二つあり。
正面の上に、筑前少将継高侯
御詠六首の和歌御奉納の額あり。

神主　留守河内守

浜辺迄弐丁斗、浜辺にも石の鳥居有之。海中に石灯籠有。海辺白砂にて無双の松原也。名所方角抄に此所を唐泊りといふ説あり。袖の湊ともいふ歟と書記せり。

赤水先生日本図に唐泊は、生松原の真向志摩郡の岬也。又、袖の湊は鐘岬の入江にあり。

午刻迄箱崎町、鳥居前茶屋にて休。昼食事、奇麗の場所也。　」（71裏）

一、名島弁財天は、小早川隆景の城跡なり。日本海中に神功皇后帆柱石有之。

一、産八幡宮は応神天皇御降誕の地也。香椎の宮より、凡三里斗り。

たゝら川

筑前の大河にして、土橋八十間斗り

浜男　箱崎より壱里半

香椎宮〈椎宮は山手にして／海辺に村あり。村中に鳥居／有之。往来浜辺よりは／大分の入込に成。〉

神功皇后御陵

石鳥居

大木の杉

拝殿

本社

社僧　」（72表）

青柳　箱崎より三里半

畔（アゼ）町　青柳より弐里

夜戌刻過着　右側　角屋義右衛門泊

一、十三日　晴　夕方少し雨降出。

今暁寅刻畔町出立、挑灯にて行。

京町　畔町より壱里

左側医師の宅十三階の松あり。

赤間　畔町より弐里

赤間の宿入口手前、左側山手に

烈女阿政の墓所　石に彫

此婦人は赤間の町大黒屋の娘十七才の時、貞節を立、此所にて自殺せし由也。」（72裏）

竹丸村

土橋の側に石立。

是より南六丁。

孝子庄助はか所あり。

竹丸村より川向の端、村小高き所に有之由。此庄助事実は驕、夫迄も感心して有之昔を語りける。

近年、筑前侯御郡廻りの節、庄助か墓に御立寄有之由承る。

長谷（ナガタニ）　赤間より壱里半

六反田の出店。

此所に追分石建。

本道通り〈六反田より／こやの瀬へ〉弐里半

〈こやの瀬より／黒崎へ〉三里

〆五里半

近道通り〈六反田より／黒崎へ〉　四里

壱里半の近道あり。

尤、人馬は本往来こやの瀬へ廻す事。」（73表）

近道

きづき

底井野

中ま

下こうじやく

流勢川（リウセ）　船渡しあり。

上の原

天満宮の前へ出れは、本道に成。

当社にすゝみの松とて大木あり。

此所より黒崎へ壱里。

こやの瀬　赤間より四里。

黒崎　福岡領　こやの瀬より弐里廿四丁。

福岡侯御領分迦の宿にて、繁昌の所也。

宿内十二、三丁、右に駅場あり。

未刻過、当宿へ着、身仕舞。小倉へ三里。

黒崎は海辺にて便利の所、魚類多し。

黒崎より小倉城下迄は、海辺の往来也。」（73裏）

小倉（ヲグラ）　黒崎より壱里

大倉（ヲヽグラ）　黒崎より壱里半

従是西筑前国
従是東豊前国小倉領　堺石建
あらうど村
清水（キヨミヅ）
此所より小倉城下は家続也。

小倉城下　黒崎弐里廿一丁
豊前企救郡小倉城主小笠原左京大夫侯御城下にして、御高拾五万石。
帝鑑間　江戸より海陸弐百六十六里余。
御先祖小笠原右近大夫従四位侍従忠真之代、寛永九年封豊前国小倉蒙。
台命鎮九州の要地為二豊二筑の旗頭而兼掌西肥長崎の事所命探題職」（74表）
小倉は九州ののと首にして大切の要地なり。
繁昌にて家中町屋家居宜しく、殊に長崎・薩州・肥後・筑前・肥前の大藩を始めとして九州大名江戸参勤上下往来の街道なれは、上方に劣らす賑かなる場所柄也。
筑前口御門より入。町屋を通り中の御門に入。

御客館
見込宜しく大造の構へ也。小倉の貴臣犬飼兵部跡屋鋪へ御普請といふ。
橋詰御門を出ると　御門内御番所あり。
常盤橋　小倉第一の橋
板橋　長弐拾間余　幅四間
欄干　きぼふし付。三都の通りの橋也。
此糸川にかけ渡す。
此橋下に、大小の船数々繋く。
此川上に豊後橋といふあり。」（74裏）
船頭所　索麺屋　向助左衛門
紋丸の内違鷹の羽
祖父太郎左衛門　一昨年歳七十四、五
父助左衛門　此節隠居
せ倅幸右衛門、此節家督助左衛門と改。
唐津侯御本陣
臼杵・佐伯・府内・御用達
此家大名にして、間数廿一間有之由、旅船問屋と見へて、常の戸に両開扉にして、内庭至て広し。
酉半刻着。手前に僕挑灯にて案内に出入、吸物

三つ物の肴にて、酒出る。膳部は、米の膳椀にして、茶漬茶碗は新渡の極濃藍地の焼物にして、凡て器物立派の事也。

一、小倉御城、天守は焼て無之由。

一、海辺にて魚類多し。中にも鯨おばやき一斤弐百文位、当年少に付三百文位。鯨のたつぱといふ所、柔にして至極よろしく、壱斤いつもは百六十文位。当時弐百七十文。煮様はぬかにまめし置。あつ湯にて」（75表）二度むし取にて、一度洗ふ。魚は柔か也。

たつぱと申はくじらのからたの皮付の所也。をばやきよりは、たつぱの方身柔也。

一、小倉織帯地　火打　名物也。

一、酒は小倉はから口を好所。中津は甘口の所。

一、小倉は上方瀬戸内等、余り船便弁理過候故却て小倉の町家商売鮮にて、困窮の由。されとも家居衣服等は、立派に見ゆ。

一、小倉より、下の関へ船渡り三里。

一、同所より大里へ壱り半。大里より下の関へ壱里半、〆三里。

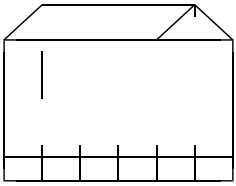
一、下の関は又格別繁昌の地故、明朝御同道申へくと、直々夕方当所へ御帰りに相成へく由、達て向助左衛門被申候へ共、夜半より、雨降出候に付断。

一、小倉城下町員五十八丁。

一、小倉領六郡十五万石　御高の所、御内検は、三十万石近くも有之候の由。

一、小倉より彦山へ十三里、中津へ十二里。」（75裏）

一、小倉領　高札場、他に殊也。〈他国は壁なし／打貫也。〉



家の中向と両脇に高札かゝる三方白壁にして、長弐間入壱間瓦葺。

左京

壱里

一、小倉領は石

只壱里と斗り記しあり。是壱里塚なるべし。
一、小倉領は郡分けの石悉く建之。
又、丁寧成は、
石を立、四方に、
従是東　中津道
〃西　小倉道
〃南　〃道
〃北　〃道
如此石処とに、追分有之。
一、小倉侯中老今の宮本伊織は、宮本武蔵の末にして知行弐千五百石家老に成る家筋の由。
岸流嶋与次衛嶋あり。」（76表）
一、十四日　夜前より雨降続。夕晴。
辰刻小倉出立。
中津口御門より出る。
黒原
湯側（ユガハ）
葛原（クツハラ）
下曽祢
千間土手（センゲン）
狸山
くさみ
従是西企救郡
従是東京都郡
神田　小倉より三里半。
入口松原海辺也。神田は漁浦也。
浜町
よばる
行事　」（76裏）
此所は繁昌の所也。家員多し。
此川上、行事の飴屋といふ富家あり。
板橋は、行事の町中にあり。
大橋　神田より壱里半
従是西　京都郡
従是東　仲津郡
刎（ハネ）木
椎田　神田より四里半。
入口手前に
従是西　仲津郡
従是東　築城郡
当宿入口右側　米屋梅太郎泊

一、十五日　快晴。
卯上刻椎田出立。
権田宿内、左に鳥居立。是より八丁。
浜辺の松原の中に、網敷天神宮有。
浜の宮と申て、其所の沖、海中にひゞとて、浮洲に松壱本斗りあり。此所に」（77表）菅公左遷の時、御船かゝりて有候より勧請といふ。
上り松
新庄
横浜
松江（セウエ）村　椎田より壱里半
四郎丸　従是西築城郡
　　従是東上毛郡
八屋〈此所より追分／本道は上へ通り中津道下通り。〉
宇の嶋
小倉領の出迦れにて繁昌の地なり。
家員多く、
町の右側　万屋助右衛門
門構へ玄関造り。造酒家にて、至て豪家也。
別家　万屋助九郎
沓川
三毛門（ミケカド）
此里に小倉領六郡大庄屋頭大富家
別府市九郎　」（77裏）
従是西　小倉領
従是東　中津領
小犬丸村　広津村の内也。
高瀬川
小祝川ともいふ川下中津の城。川端にあり。此川船渡し。
中津城下　松江より三里。
豊前下毛郡中津城主奥平大膳大夫侯御城下にして、御高拾万石
帝鑑間　江戸より弐百六十八里
巳刻着
小倉口より入。

一、中津御城は地城也。大手御門前通る。家中至て麁宅也。
一、御菩提所　禅宗　利生寺
一、中津は城付は六万石。城下近く他領なり。
一、切手六札とて六十文通用也。
一、中津町員　十二町　」（78表）
中津の町造酒家十三、四軒
高千石仕込　家毎に銘あり。
加茂川　船町井筒や　田中勘之助
延齢酒　京町播磨や　小畑甚五右門
魚町友や　源蔵（ゲン）
室町村や　儀右衛門
船場（センバ）橋本や　七右衛門
臼杵へは此檜本や、酒積越す。
右の分大家也。凡て甘口にて濃し。
巳半刻島田口木戸外。
米屋幸右衛門に休昼食。
一、中津御高札
右之趣従公義、被仰出（ヲハンヌ）訖。
領内の者共、堅可相守者也。
大膳

嶋田口より出る。中津城下より宇佐へは五十丁壱里に成。
嶋田
中殿
一つ町　」（78裏）
右に北原村、芝居者住所
尾上道右衛門在所
池永村
御前座　三好重次郎在所
いるまる　嶋田より弐里
いるまる川
上野
富山
本往来上は道通り。
中津往来下た道通り。此所にて一所に成。
本往来上は道通りは　」（79表）
」（79裏）
大根（ヲヽネ）川　此辺より左に入込、善光寺道あり。
猿渡り川
久々姥（クグウハ）

茶や数々
此所杖突まんぢうとて名物餅有。
此所より拾五丁斗行。
　従是西　中津領
　従是東　池田岩之丞支配所
せんけいじ原
　此原広くして高けれは、四方眺望よろしく、此辺豊前国にても至て打開きたる所にて、中津・今津・長崎・豊後の国東都高田向は、周防中の関より長州の下の関迄見へる。
　豊後二子山　寅卯に当る
　同湯布鶴見　巳
　豊前八面山　申
　何国より見ても同し姿に見ゆるゆへ、八面山と申由。面白き、山也。」（80表）
　同　彦山　酉
　彦山は小倉より、十三里。
　彦山は豊前・筑前・豊後三ヶ国に跨る高山也。
　彦山は京都九条家・二条家より座主代々下向するゆへ、太宰府へ参詣の人は、彦山参詣を忌と申伝事有。
　求菩提山は、彦山よりは手前のもみ立たるよふの小山也。
　此せんけいじ原にて、四日市・西御坊普請の牛引の大木を老若男女群集して、四日市へ引出すを見物す。車にて原より坂を籠に下すよふす、見事なる見物也。
四日市　御料所　いるまる川より弐里
　左りに日田御代官出張所あり。萱葺役所也。
　右に、東本願寺御坊　二重屋根
　西本願寺御坊
　当時普請最中也。」（80裏）
　宿内店屋数々人馬は庄屋宅にて継立。
　尤、増賃銭取候事心得可有之。
閣村
新村
　やくくわん川　橋あり
　此間　日田御代官支配所
　嶋原領　　堺石
宇佐の平松

大木の枝を長く往事の上にさしかくしたる松あり。

宇佐　四日市より壱里

町入口町内宇佐神領と棒木建之。

丁内八丁も可有之。当初より高田へ弐里。

町内左側　亀屋理右衛門泊。

人馬継方至て不都合成所にして、其上遅刻に及。神領且嶋原領にて、取締も無之。心得可有所也。

」（81表）

宇佐八幡宮

鳥居前　高札　松平主殿頭

下馬

銅大華表

左右宿屋あり

さや橋

呉橋（クレ）といふ。幅弐間長十三間

欄干ぎほしの銘　豊前少将忠利、細川越中守従四位左少将忠利侯拾五石にて豊前小倉の城主たりし時、寄附せられし事と見へたり。

寛永九年封を、肥後熊本に移す。

仁王川

右大池あり

中嶋に阿弥陀堂あり。

石灯籠　数々。

右に取て、石壇を登る。

前に高札あり。

」（81裏）

黒船頻渡来に付、従禁庭御内願御祈御教書を以、重て被仰出来は廿一日より十七日箇の間、於

神前御祈祷修行

寅

三月　両大宮司

左に能舞台

右に下乗

右蜷松

折廻りて次第登り

若宮八幡御社

赤華表

唐破風御門

左御神輿屋
三輿　大内義隆寄附　」（82表）
（「本社、拝殿、廻廊、惣檜皮、惣赤塗也」として俯瞰図あり）
一、両大宮司
宮成（ミヤナリ）兵部　正五位下
至家（イトツケ）勝丸　従五位下
両家共五位より三位に昇る。
社領千石〈千石高にして正味は三百石の／取納故至て、困窮の由。〉
社々も破損し、社家も破壊したり。」（82裏）
名たゝたる古社ゆへ境内至広くして、両大宮にも放ち門、玄関かゝり書院、向大家也。されとも萱葺也。凡て神さひてふるめかしき神境也。
一、勅使は、六十一年目甲子に御下向。
一、社僧は真乗坊。
一、社人は、多人数有之由。
肥前高来郡嶋原城主松平殿頭侯御高七万石
帝鑑間　豊後高田役所あり。
一、十六日快晴　夕方　無波にて曇。
辰刻前宇佐出立。
橋津
此所より豊後高田。松平主殿頭様御領分。高田近し。壱里余といふ。
此所より人馬は岩崎の本道通りに行。
人斗は、橋津出迦れ、川の飛石より、右に取。井出光通十二、三丁も近道の由。夫より本道一所に成。　」（83表）
井出光村
金丸村
黒崎の猫橋　豊前
豊後　国境石
榎の熊　宇佐より壱里半
立石へ壱里半
むくの谷西屋鋪
従是　立石領
四軒屋
立石の地蔵峠
立石　宇佐より三里

五十丁道也。
豊後速見郡立石陣屋木下図書助侯御在所也。御高五千石。
柳間　江戸より百六十弐里
交代御寄合表御礼衆
参勤交代は陸にて国東郡高田へ出。
高田より御参船の由。
天満宮
御菩提所　禅宗　長立寺」（83裏）
左に御陣屋あり。
町少々有之。
右に城山といふありて、桜の木殊の外多くして、松の間々に見ゆ。
一、立石は山中にして至て、不用由の所と見へたり。村々民家不宜、貧民のみにして殊に、本駅場ゆへ人馬殊の外困り候由。
金山（キンザン）　出店酒家あり。
簗河尻　出店壱軒　立石より壱里。
此間
従是西　立石領

従是東　日出領　堺石
豊後速見郡日出城主木下主計頭侯
御高二万五千石　柳間
上市村
下市村
是間左に杵築への道あり。
野原村　店有。
郷川　土橋あり。此橋を越、金越にかかる。」（84表）
一本松　出店壱軒　立石より弐里
金越
上り壱里、下り小浦迄壱里の山也。立石の方より上りは次第上りにて至て道宜敷。峠、徳田といふ所に農家弐、三軒あり。峠に唐木山といふ唐木斗の山あり。峠より頭成の方へ下りは、九合目の所至て急成坂にて、大難所なり。
辻間村　森領　出店壱軒
此所より日出御城、頭成・小浦・別府・四極山・府内、関、手永見へて、絶景也。
此所より左に日出への街道あり。

津嶋村

従是西　久留嶋　信濃守領分

森侯　棒木は御高に似合す。殊の外大造成事候て、細川侯の棒木に等し。」（84裏）

此間、日出領少々入交。

頭成村

此所は森領也。

豊後球珠郡森領主久留嶋信濃守侯

御在所は森御陣屋也。御高一万二千五百石

柳間　江戸より森迄　二百七十二里

久留嶋侯氏頭成より御乗船有之。

此所に御茶屋山手にあり。又御船入あり。

住吉社

寺一ヶ寺

町少しあり。魚類多く便利の所なり。

府内沖の浜へ船便。

別府へ船便。

此分先書の写。此筋通行せず。

小浦　立石より四里

嶋原御預り所　庄屋脇

此所人馬庄屋方にて継。尤、駕垂駕等を無差別先令両人にても五人差出余分」（85表）賃銭取候也。別府迄三里の所、先令・人足三人馬壱疋にて賃銭弐貫弐百文余取申候。其外人馬出し方、面倒にも有之。其上別府も同様、府内迄の所、人足余分に差出て、賃銭も余分に取。彼是賃銭高とも相成。面倒に付、天気次第にては頭成より府内、沖の浜へ船借り切り乗可申儀肝要也。尤、借り切壱〆五百文位也。長旅抔は、足をも休め、至極肝要事也。

小坂村

古市

里屋

平田

此間より久留嶋侯御領内に成。

慈王寺村

石垣原

右に吉弘加兵衛　下馬の松
暫行久留嶋侯
嶋原御預り所　堺木建
別府　小浦より三里
浜脇　」（85裏）
赤松村
銭亀越　上り壱里
峠城の越しと申所へ府内より弐里也。
棒木建立。暫行。由原八幡宮への近道あり。
由原八幡宮
生石
右山越不致浜辺を行候得は、半道近し。
尤、馬は不通。
駄の原
勢家
沖の浜
仙石橋
」（86表）
頭成より暮前、船借り切にて、其夜亥刻過、沖浜へ着。直に府内町宿へ着。
府内城下　別府より三里。
頭成より海上五里。
豊後大分郡府内城主松平左衛門尉侯御城下にして、御高二万千二百石
帝鑑間　江戸より二百六十三里半余。
西御門より入。
亥刻過　竹町　音羽屋庄六泊
人馬継所は岩田。
一、十七日　曇　雨に成
辰刻過　府内出立
東御門より出。
坊ヶ小路　川
下郡　府内領　府内より壱里　」（86裏）
府内城下よりは僅半道斗なれとも、坊が小路川半道に立候由。庄屋方にて人馬継。
久留米より瀬の下川を渡り、豆津にて人馬継かことし。
猪野原

此間に、府内領
臼杵領　境
森村　下郡より
当御領　大庄屋　葛城九郎兵衛
榎ヶ瀬川
此川中　臼杵領
肥後領　御堺
高田　森村より
森村より此高田へ、人馬継候筈の所、今日雨天
訳合有之候に付、直に広内村へ通候人足。
百道川
船わたし　」（87表）
百道辻　肥後領
臼杵領　御堺
百道辻　出店四軒　久所村より出す。
丹生大堤
広内村　森村より
御役所　小庄屋
人馬は小庄屋方にて継立。
白木峠　出店壱軒
通村
仏石橋
末広村　広内村より
大庄屋　吉田久間蔵
大庄屋方にて人馬継。御城下迄、
暮方当村へ着。雨強く成。夜に入、
戌刻、臼杵城下へ帰着。」（87裏）
」（88表）
」（88裏）
」（89表）
加島氏　」（89裏）

注記

本研究はJSPS科研費（課題番号JP18K00323　研究代表者　鈴木元）の成果の一部である。